

# サン＝シモンの科学と宗教

富 岡 勉

## 目 次

1. はじめに
2. サン＝シモンの環境
3. 科学的研究への探求開始
4. 科学と宗教
5. おわりに

## 1. はじめに

今日の科学の進歩は目を見張らせるものがある。その進歩の速度はまた、今日、発見発明されたものは、明日はもう古くなっているというような速さである。また、わが国が科学を駆使して世界にその生産技術を誇っていることも周知の事実である。わが国ほど生産に当ってロボットに従事させている国も少いと言っても過言ではないかもしれない。しかし、一方では科学の危機が叫ばれている。科学は何のために存在するのか、を問われるとき、いわば、何のために科学は研究されるのかと問われるとき、ただ、研究こそ価値があるとの答えの時期は過ぎたのではないか、ということである。科学が何に役立とうとしているかという価値判断を求められている転機が来ているのではなかろうか。科学が人知の発展につれて独自の道を歩みはじめた時をもう一度省みる時期が来ているのではないか。科学が人間から離れ、科学自体の道を一人歩きするとき危機が訪れるのではなかろうか。

18世紀半ばから19世紀のはじめにかけて社会の科学的観察を志したクロード・アンリ・ド・サン＝シモン (Claude-Henri de Saint-Simon 1760-1825) は、この危機の到来を予測してはいなかったろうか。彼は科学を重視する反面、宗教の霊的優位を認め、世俗権力と霊的権力の関係を明らかにしようとした。科学が人間の霊から離れ、科学独自の発展過程を追い続けはじめるとき、科学が恐るべき方向に進みはじめた。「人間の科学」であるべきものが「科学の科学」になって、逆に、人間の生命を脅かす存在となった。サン＝シモンが科学を重視しながらも霊的権力の優位を認めたのは、このことが生ずることを見通していたのではなかったろうか。彼は、このことについては一言も触れてはいない。しかし、彼の論旨の中から、われわれは推察することが出来るのではないだろうか。

まず、彼がどのような環境にあり、その環境が彼の思想にどのようにあずかって力があつたか、また、なぜ、彼が科学的研究へと進んだかを観察し、その中であって宗教を忘れず、いや、逆に宗教を重視した点を伺ってみることによって、今日、科学と宗教とがどのような関係になれば

ならないか、人類にとって幸福とは何かを問うてみたいと思う。果して、科学は科学、宗教は宗教と、それぞれの道を独自に歩むことが幸福につながるのであろうか。

## 2. サンーシモンの環境

サンーシモンが正しくはクロード・アンリ・ド・サンーシモンと呼ばれることは既に記したが、いわゆる、サンーシモン家の一族である。1760年10月17日、サンーシモン家のバルタザーアンリとブランシェーエリザベスの間の第二子で長男として生を受けた。日本では徳川家治將軍の時代に当る。この時、フランスの内外は、ルイ15世がヴェルサイユで暗殺未遂のため重傷を負った後で、英仏が互に植民地で争いをおこし、しのぎを削っていた頃で、国民は重税にあえぎ、心ある知識人は百科全書の刊行に協力して啓蒙運動の最中の時代であった。

何処の国においても同じことが言えるようであるが、大名とか大家になると家系に重みを持たせるため、先祖の出身を誇大に宣伝する。時には専門家に家系を作ってもらふことさえしたと言われる。サンーシモン家も例に漏れないようだった。サンーシモン家も宮廷貴族でベルモンド伯爵出身のシャルルマーニュ大帝家直系の子孫と自称していた。クロード・アンリの生誕地はピカルディのベルニィである。父親のバルタザーアンリ伯爵は、ルイ14世とオルレアン公フィリップ摂政時代に宮廷をかつ歩し、14世の宮廷と摂政の回顧録を残したルイ・ド・ヴロア公爵 (Duc Louis de Rouvrey, 1675-1755) の従兄弟で、古典の翻訳とか軍事史家であり、ヒヤシンス栽培に生涯を捧げたマキシミリアン・アンリ候爵 (Maximilieu-Henri, 1720-99) と兄弟であった。36才のバルタザーアンリと結婚したエリザベトは21才の乙女であり、彼女もサンーシモン家の一員であって、アンリ・ド・サンーシモン候爵と候爵ガストナ・ボッタの未亡人シニョーラ・ブランシュ・ルイズ・ツァカリーブとの間に出来た一人娘であった。

年金生活者だった父親バルタザーアンリは軍人で大金持ではなかったが、パリには冬季の別荘があり、ベルニィには広大な土地と館を持っていた。従って、クロード・アンリが幼年時代、パリーの社交界に出入りし、多くの有名な知識人に会うことは可能であった。これらの人々の中からクロード・アンリは教育を受け啓蒙もされたことであろう。とくに、百科全書の中心的人物グランベールに師事し、多くの影響を受けたようである。哲学とか科学的な知識面でグランベールの影響は大きかった。サンーシモン（以下クロード・アンリ・ド・サンーシモンを略称してサンーシモンと記す）の教育歴は詳細には分らない。1809年の『百科全書の企画書』(Projet D'Encyclopedie) の最初の部分に次のように記されているものがある。すなわち、

わたし（たち）が受けた教育を呼び起してみよう。その教育はギリシャとローマの歴史に注意を引きつけられることから始まった。グラックス兄弟とかブルータスの勇氣について若い心をおどらせた。彼らは共和政治という匕首でわたしたちの静かなもろい魂を愕然とさせた。古典語の研究からフランス語の研究へ導かれた時、民主的な感情で彼らはわたしたちを激励した。ジャンジャック (Jean-Jacques)、ボルテール (Voltaire)、ヘルベティウス (Helvetius)、メイナル (Meynal) など、すべての百科全書家は、デイドロ（牧師の最後の人の腸で諸王の最

後の人を絞首刑にすることを望んだ)を含めて、身近にある著者たちであった。教育はその目的を達し、わたしたちは革命家に作り上げられた。<sup>註1</sup>

と説明している。原文では「わたし」(Je) としないで Nous 「わたしたち」となっている。これは、一般論文調にしたのか、あるいは、サロンに出入りしていた青年たちを含めての意で複数にしたのか定かではない。これから見ると、かなり早くから啓蒙哲学に入り込み、精神的に成長し批判力も備えるようになっていたのではないと思われる。彼のこの状態が13才に至って父親バルサダアンリといさかいを生んだのではなかったろうか。それは、彼がはじめて聖餐を受けることを無意味だと拒むことから始まった。父は怒って彼をサン＝ラザール刑務所へ送った。叔父叔母などの同情によって刑務所から出されたけれども、父親との間の人間関係は次第にその距離を広げることとなった。

16才になった1777年1月、彼は軍隊の中尉に任ぜられた。父はこの任命を直ちに受けることに反対した。そして、彼がこれを受けるまでには1年の年月が流れた。このことから、バルサダアンリの息子に対する怒りの程度の根深いことがわかる。2年半後に大尉に昇進した。フランス軍に加ってアメリカ独立戦争に参加した。この戦いで功績を上げ、軍人である父に感動を与えることによって両者の不仲が改善されるよう望み、彼は父に自分の活躍ぶりをしたためて戦地から手紙を送った。けれども、父バルサダアンリはこれに興味を示さず、何の返事もしないまま、1783年2月、息子を許すことなくこの世から去った。

彼はアメリカ滞在中、ヨーロッパにないものを発見した。それは正に「新世界」であり、新しい息吹きであった。宗教的自由があり、社会的特権のないこと、世襲財産が政治上ではなんら役立たないこと、平和主義、産業と能力による出世の関係、民主的な制度の基盤のあること、など様々のことを認識した。これらのことを見るにつけ、彼は自分は軍人に不向だと自覚させた。これを彼は『アメリカ人への手紙』の中で次のように述べている。すなわち、

諸君、わたしのアメリカ滞在中、わたしは軍事兵学よりも政治学の方に、より多くわが身を没頭させた。戦争そのものはわたしに興味はなかったが、その目的には大いに関心を引かれた。そしてその関心は、喜んでわたしに正常な理由を支持させるようにした。わたしは〔戦争が〕終結することを願い、度々独り言をいったものだが、わたしは確かにその手段を願わねばならなかった。平和が近づいているとわかった時、わたしは全く、職業軍人に対する愛想ずかしで参ってしまった。わたしの興味と好みがわたしに要求している仕事なのだが、どんな職業につくべきかわたしは明らかに悟った。軍人であることはわたしの職業でなかった。わたしは全く違う方向に運命づけられていた。そして、全く別種の活動範囲を申し上げるかもしれない。次いで、文明文化の改善にむけ働くために、人間精神の進歩を研究することである。それが、わたしに課せられた目的だった。その時以来、全くそのことにわが身をゆだねた。わたしは、そのことに全生涯を捧げ、この新しい課題がわたしの全精力を引きつけはじめた。<sup>註2</sup> (〔 〕は筆者挿入)

と。つまり、人間精神の進歩の研究を進めることであると悟ったのである。彼は文化の改善、社

会の改良に働くという自覚は、アメリカに内包していた社会哲学を具体的に知ったからに他ならないであろう。

レ・サンテ（ドミニカ）の海戦でイギリス海軍と交戦中負傷して捕虜となり、ジャマイカに移されたが1783年のベルサイユ条約の締結で解放された。そこで彼はパナマ運河の計画を持ってメキシコへ行ったが、拒否されてフランスへ帰った。フランスでは退屈な日々を送っていたが、メッツの軍官学校のコースに出席することによって得た科学知識は、ますます、彼の科学に対する興味を沸かせ、いよいよ、軍人嫌いにさせた。1787年にスペイン政府の運河計画を聞き、助力を申し入れるためにマドリッドへ旅行し、労働力組織化の責任を引き受けようとしたが、この時、フランス革命が勃発して、彼を母国フランスへ引返えらせることとなった。

註1. Oeuvres tome VI, Projet D'encyclopédie, second prospectus, Avertissement, p.281

註2. Oeuvres tome I, L'Industrie, Deuxième Lettre, p.148

### 3. 科学的研究への探究開始

フランスに帰ったサン＝シモンは、故郷ベルニイで革命の恐怖にさらされることになった。1790年2月、彼は目ざとく革命側に身をおくよう努めたので、ベルニイの近くのファルビで市議会議員に選出された。彼はここで革命の合言葉——自由、平等、博愛——に基いた革命思想に対する彼の信念を、議会を通して人々に訴える機会が与えられた。

全市民は能力に応じて、かつまた、その徳と才能のなんらの区別なく、あらゆる公けの栄与、職務、ならびに地位に対しては等しく適格である。……註1

と強調した。これは、彼がアメリカを見ることによって、人間能力に対する評価と徳の大切さを痛感したからであろう。能力によって社会的に認められていくアメリカに比べ、能力があっても社会的栄与に浴せず、世襲的社会地位が尊ばれ、牛馬の如く働かされて無為徒食の特権階級の生活維持のためと、戦費調達のためとに重税を課せられているフランスの現情が、矛盾に満ち満ちている姿を見るにつけ、人間不平等を認識することの大切さを、彼は市議会で強調したのである。

能力ある人々が真実に尊重される社会になってこそフランス社会は革命精神が生かせると思った。それにはフランスに産業社会を来らせることである。このような社会では政治にわずらわされることなく、人々が能力を発揮することによって産業を発展せしめ得るからである。そのためにはイギリスに習うべきである。産業革命による新しい機械力の導入された組織的な社会でなければならない。従って科学的知識を持った人材を必要とする。彼はそのため、養成機関としての科学学校の必要性を経度学会 (Le Bureau des Longitudes) に訴えたが無視された。また、これを推進のための資金を獲得すべく投機を行った。革命政府が貴族とか教会等の財産を没収して国有財産とし、新政府の財政上の資金を得るために之を売却したが、彼はこの売りに出ている国有財産にスポンサーを見つけて投資して多大の利益を得た。

この時分からロビスピエルの目がサン＝シモンにも光り出した。清廉潔白故に徹底的に追求の

手をロビスピエルはゆるめなかった。サン＝シモン家は宮廷貴族の一族であり、革命側が最も敵視する階級である。クロード・アンリもその一族であることは逃れなかった。サン＝シモン家に対するロビスピエル政体の仕打ちについては、マニエル (F.Manuel) の『アンリ・サン＝シモンの新世界』(The New World of Henri Saint-Simon, Harvard University Press, 1956) に詳細に記されている<sup>註2</sup> のでそれに譲ることとするが、彼自身も伯爵の肩書が敵意と疑いの目で見つめられていることを知っていた。彼は伯爵を返上したり、改姓もした。政府没収の財産の買漁り投機も疑惑の目をもって見られた。フアルビ市議会からの歎願にも不拘、拘置投獄された。11ヶ月間、革命に対する無政府への憎悪とギロチンの恐怖を味わされた。1794年のロビスピエルの没落が彼を救った。彼は再び元の姓に戻り投機活動を続けた。

サン＝シモンは投機で得た収入が相当巨額だったらしく、シャバネ通りに大きい家敷を手に入れ、サロンを開き、召使いを20名程雇い、自分の姉妹をも共に住ませ、著名な学者、科学者を集めた。これには多大の費用を要し彼の財力では維持出来なかったので、スポンサーのプロシヤ駐英大使レーデルン伯爵からの援助も打切られた。これはサン＝シモンにとって打撃であった。翌年シャバネを去り理工科大学の近くに移り、大学で物理と数学を学ぶこととした。彼の科学への情熱が燃えさかり出すのである。1801年まで研究活動は続けられた。

この研究活動中に彼は多くの若い科学者と知己になり、青年科学者たちが教育している科学の公教育を組織化し、自由な教育がなされるすばらしさを拡大し、知的能力ある人々を励ます必要を感じた。そのため彼は1801年の理工科大学での研究を終るまで、科学者援助に力を注いだ。次いで、生理学を学ぶため医科大学に移った。社会の組織化を考えると、組織を科学的に研究する必要を覚え社会を人体と同様、一つの有機体とみなし、社会生理学として社会組織を把握することが適切であると考えたからに他ならない。

医学を研究中に若くて作家、作曲家のソフィア・ド・シャングランと結婚したが、結婚に対する両者の理解が異り、約1ヶ年で解消となった。離婚後スイスのゼネバに行き、ここで、その滞在中に、社会の再組織化についての彼の考えを纏めることが出来た。これが『人類への一ゼネバ住人の手紙』(Lettres d'un habitant de Genève à l'humanité)であり、1803年、パリでこの手紙を基にして出版されたのが『同時代人への一ゼネバ住人の手紙』(Lettres d'un habitant de Genève à ses contemporains)である。

百科全書派の洗礼を受け、啓蒙思想をたたき込まれたサン＝シモンが、無政府、無秩序状態のフランス革命の恐怖のみならず、革命に到達せざるを得なかった状況——特権階級のみが人間であるかの如きフランス社会の民衆軽視を経験し、アンシャンレジームと革命を反省批判して、これを終りに導こうとサン＝シモンが努力したことは、理解出来るのではないか。自己の経験した戦りつすべき暴力を否定し、無秩序、無政府の悲しさを組織化された社会に引戻し、人間の真の平等が尊重される社会状態とすることが一般民衆の幸福につながると判断した。それは一つの原理——キリスト教——から発していると思われよう。彼の考え方は、「同時代人への一ゼネバ住人の手紙」と、1825年の彼の最後の作品『新キリスト教』(Nouveau Christianisme) とを眺める

だけでも明らかになろう。この二作品は彼の生涯の啓蒙運動の本論であり、序論であり、結論であって、その途中における諸作品は、彼の主張の根拠づけと実証的証明のための試行錯誤的実験遍歴ではなかったろうか。

註1. Oeuvres de Saint-Simon & D'Enfantin, AALEN OTTO ZELLER 1963, tome I, Notices Historiques, p.15-16

註2. The New World of Henri Saint-Simon, Harvard, 1956, Part 2, Victim of the Terror, p.24-41

#### 4. 科学 と 宗 教

かつてサロンをシャバネーに持ったサン＝シモンが、今や、貧困の最中にあることはフランス社交界にも伝わっていた。彼は華やかなパリーでのサロン維持に全財産を使い果したのだった。住居さえ一定でなく、転々と移り住んだようである。1806年10月14日、彼がシャバネーでサロンを開いていた当時の常客の1人であったルイ・フィリップ・ド・セギュール伯爵の同情により、複写士の仕事が与えられた。この筆耕の仕事を9時間やって、自分の研究は帰宅後の夜間に行うことによって、やっと食べて行くことが出来た。この時分は、ナポレオン軍がトラファルガル海戦で敗れ、ドイツ内ではライン同盟が出来、神聖ローマ帝国の滅亡した時代である。この時、彼が召使いとして雇ったことのあるディアール (Diard) という人から援助の申し出があり、これを喜んで受けた。

こうしてディアールの援助を受けつつ彼が研究したものをまとめ、小冊子として出版した。それが『19世紀の科学的研究序論』(Introduction aux travaux scientifiques du XIX<sup>e</sup> siècle)であった。この中でサン＝シモンは緒言 (avant-propos) において大切なことを述べている。すなわち、

2通りの科学的研究がある。事実の探求 (chercher des faits) と事実に基く推論 raisenners-ur les faits) とである。すなわち、一般理論の改善である。註1

と。ここにおいて、17世紀は各分野で天分ある人 (genie) を生み、18世紀は精密科学が大進歩をなしとげて迷信的な思想が粉碎され、19世紀は社会組織の科学が実証科学となったとする。これらのことを通して彼は、われわれに一元性と理神論とを提示している。すなわち、科学と道徳と宗教について考えを及ぼすわけである。

サン＝シモンは、科学的進歩を促進することを直接目的とするような研究からさらに進んで、社会的存在を改善するための新しいことを考える。ディドロとかダランベールによる百科全書派の試みは「新しい体系の樹立よりも、旧体系の破壊をさらに効果あらしめようと活動した」註2のであるが、新しい科学の組織化の企てを必要とした。これは自然科学の分野ばかりでなく、人間精神の科学の分野において、とりわけ、重要であると彼は考えたように思われる。それで、人間精神の発達過程を省みることによって、新しい体系の組織化に進むことが必要だった。そのため

には歴史の考察が要求される。彼は歴史をソクラテスの前と後に二分し、前を古代史、後を現代史とする。それは、ソクラテスが思想の一元的性格 (la caract re unitaire) を明確に銘記し、神の思想が科学的計算の道具として認められるべきであると唱えた最初の人だったからである。<sup>註3</sup> サン＝シモンは、さらに、現代史を二分し、前半を理神論者の仕事を中心で、後半を物理学者の仕事を中心の時代としている。サン＝シモンでは人間精神と一般思想とをほぼ同じに扱っていると見られる。一元的性格については、サン＝シモンは終始一貫した態度をとった。ソクラテスは一つの神の中に権力を限定する考えを生み、神が全体としても部分としても、すべてのものを支配するとしたが、デカルトに至ると、「神は宇宙を創造し、一つの不変の法則に宇宙を服させた。」とした。唯一の神の支配という考えである。この世のすべてが神の一貫した支配下にあることは自然科学のみならず、社会科学の分野においても同様であるとした。この科学の思想が、神——一つの宇宙と一つの知性<sup>註4</sup>——から出ているものを、人間が思想として体系化しているものであるというのである。思想は最初哲学的性質があり、次にプラトンとアリストテレスが科学的性質を加え、それから、キリスト教が樹立され宗教となった<sup>註5</sup> という。

信仰を実践に移すと道德の問題も生じてくる。サン＝シモンは「他人にしてほしいと思う通りに他人にせよ」<sup>註6</sup> という聖句をとり上げる。これは信仰の実践であるから拘束力を持たないし、また、義務として行うべきものでもない。しかし、社会生活上準義務的に行動させるにはどうすればよいか、ということであろう。他人が幸福になりたいと思っていることは紛れもない真実であるから、他人が幸福になれるように他人のために役に立つ仕事をする以外にはない。幸福とはこの世俗世界では何か？サン＝シモンは豊かな生活、物の満ち足りた生活と考えた。というのは、必要とするものが充分充足されることである。つまり、他人が必要とするものを作ってやること、労働による生産である。社会が必要とするものの生産にたづさわることであろう。そこから、「人は働かねばならない」(L'homme doit travailler)<sup>註7</sup> というのである。「働こうとしないものは食べてはならない」<sup>註8</sup> のであり、無為徒食 (be d sae uvr s) であってはならないのである。

われわれ人間は肉体 (物質) として取扱える部分と、考えたり記憶したり、知識として内蔵したり、悲しんだり喜んだりするような形になって現われない内的なものも持っている。これを霊的と解した場合、先の物質と称したものを世俗 (地上) 的なものと言えるであろう。このように二つに分けたとき、サン＝シモンは両者を実証科学的に把握しようとした。『人間科学の覚え書』(Memoire sur la Science de l'homme) がこれである。彼の著作には終始、この二者が絡み合う。彼がアメリカ独立戦争参加中に得たものは、政治、産業、平和、自由と絡んで、人間精神の進歩を研究する必要性であった。これを研究するには、精神だけでなく人間そのもの、人間全体、人間の形成する社会、をも研究する必要があった。しかも、その研究方法は自然科学の方法と同様のものでよいのではないかという推測であった。

人間科学の進歩に最も役立つものをやりたいという願いにかられて<sup>註9</sup> 科学的推測による研究を進めた。

百科全書派の啓蒙運動によって18世紀頃から、独立した「科学」として科学が擡頭しはじめた。

この科学は最初は宗教から全く自立した存在としては考えられなかった。サン＝シモンの『万有引力の研究』(Travail sur la Gravitation Universelle) といえども神から全く遊離したものではなかった。科学の独立性に限度があった。また、近代の如く、「自然法則」という概念もバッキリとは言われていなかったようである。

ところで、われわれは「科学」をどう理解しているか。普通、科学と言えば、われわれの頭には「自然科学」が第一に浮んでくる。自然に対する解釈である。しかし、最近では自然科学のみならず、人文科学も社会科学も含まれている。この場合、われわれは人間の外界認識、人間の社会的活動、人間個々の内なるものの活動をも指している。つまり、人間の営み全てを指している。この人間の営みを、単に事実の羅列をするだけでなく、何らかの方法によって体系づけてパターンを探り、推測によって予言能力を持たせている。サン＝シモンが、とくに、人間科学として論ずる場合はこれである。彼は自然科学の範ちゅうの生物学的な扱いばかりでなく、人間精神の発達とか過程の歴史的な部分をも扱う。これは、哲学、道徳、宗教をも含む人間全体の営みが入ってくる。従ってサン＝シモンの言う科学とは広い意味であることがわかるであろう。

さて、サン＝シモンはベーコン、デカルト、ニュートンをしばしばとり上げる。ベーコンは自然に従うことによって自然を征服すると説いたことは周知のところであろう。一見、この矛盾しているように受取れる言葉であるが、自然に逆っては自然を研究することは不可能であって、自然にそって研究を進めることによって自然法則も探求出来る、これが、ベーコンの学問の目標だった。彼は実に数多くの経験を収集し、それを、パターンに分類して帰納的に推理していった。しかし、これだけでは完全な自然科学とは称し得ないと言われている。フランス人のデカルトはベーコンと逆だった。演繹的方法をとった。そして、力学を基礎とした。これはイタリア人のガリレオの力学を基盤にしたと言われている。天体の運行も地上の物体の運動も、同じ力学で把握したものだった。ベーコンもデカルトも何れも従来のスコラ哲学へのちよう戦であった。宇宙は地球が中心でないということで、地球中心のカトリック神学のボールが一枚一枚はがされていった。ニュートンは実験的方法だけでなく、数学的方法によって理論体系をつくった。従来の神学とかスコラ哲学と全く違う方法で、宇宙のすべてを明らかにする学問として体系だてた。ニュートンも演繹的だった。ニュートンは形式的仮説、つまり、「万有引力は距離の2乗に反比例する」という仮説である。この仮説を用いることによって演繹し、諸種の経験的事実を実際にうまく説明し得たので、これが受入れられたわけである。

では、「万有引力」によって神から全く離れた人間として、ヨーロッパ人は独り立ちが出来たのだろうか。当時は現在のように「科学」は科学としての独立の道を歩むことが出来るほど専門化していなかった。当時の科学者は、諸法則を神の与え給うた法則として受入れていた。つまり、神の与え給うた法則として自然に与えられたものが自然法則であり、人間社会に与えられたものが人間行動の基準として道徳的法則があるのだとした。

それでは、神と自然、神と人間との関係はどのようなであったろうか。まず、神が自然とか人間に、やさしく行届いた世話焼爺さんの如く温かく接してくれるカトリック的な神から、変身した



神となった。宗教改革によって、神は自然からも人間からも超越的な存在となった。ここに、近代科学はその出発点を宗教改革だとする説も生れる。「神は人を追い出し、エデンの園の東に、ケルビムと回る炎のつるぎとを置いて、命の木の道を守らせられた」<sup>註10</sup>のである。神は人間を追放して一見冷やかな存在となった。しかし、審きだけの神でなく、新約においては人間の計り知れない大きい愛としての十字架の福音を与えた神となっている。本音は温くやさしいが節度あるしつけのきびしい神なのである。

アダムとイブの原罪により、神は人間からも自然からも超越した存在になられたので、人間は、もはや、盲目的に神の言われるままにロボットのように動く存在でなく、自由と判断力を与えられた存在となった。そのため、人間は自由自立の活動が可能となり、神から与えられた自然法則とか道徳を探究し発見出来たわけである。しかし、神が全く自然も人間も省みられず放り出してしまわれたのならば、自然はバラバラで勝手に活動し、人間も思い思いの行動をとって、宇宙は收拾のつかないものとなろう。ここに、唯一の神が一元的に宇宙を支配するけれども、自然と人間から超越した存在である所以がある。サン＝シモンがニュートンを高く評価するのは、神の与え給うた自然法則の中心たるべき万有引力を推測したことは、神の一元性を明確にしたというわけである。サン＝シモンは言う。

引力の観念は神の観念と対立するものではない。なぜかと言えば、引力の観念は、神が宇宙を支配する不変の法則という観念にほかならないからである。<sup>註11</sup>  
と。そして彼は、

神が宇宙を従わせ、それによって神が宇宙を支配する法則と同じだと考えられる引力の観念に基づいた物質的でも精神的であっても諸科学の一般理論を組織すること。<sup>註12</sup>  
が出来ると見た。さらに、彼は、この一般理論の組織をヨーロッパ社会全体に拡大し、国際的社会の再組織を考えた。

この仕事の結果は、ヨーロッパ社会の再組織であろう。それは、ヨーロッパ社会を構成する全国民に共通の一般制度、それぞれの国民の啓蒙の度合に応じて彼らに科学的なものとも宗教的なものとも思われるが、しかし、どのような場合にも実証政治的な作用、つまり、国民と国王との野心を抑制する作用を及ぼすような制度である。<sup>註13</sup>  
と説明している。

このような、引力の観念に基づいた諸科学の一般理論の考えは、中世のカトリック教からは出てこない。中世のカトリック教では、先に記したように、自然とか人間からは超越的な存在として神はなく、人間的温かさのある神である。けれども、この神が、宗教改革によって超然たる存在として、自然とか人間とかとの間に一線を画したことは、これは大切なモメントと言うべきであろう。

このような観点からすれば、先にも記したが、近代科学もまた宗教改革からはじまることとなる。ルネッサンスからはじまることとする観点もあるが、これはルネッサンスのヒューマニズムが人間中心の考えのため、人間を大切に近代を作ったと言うのであるけれども、宗教改革を

出発点とする場合は、中世カトリック教の伝統的な教皇を頂点とする階層的な人間関係の社会のきずなが切断されて、神の前に人間一人一人がむき出しに立たされるのである。

サンーシモンは『人間知性の発展の観察段階順序』(La série des différentes nuances observées dans le développement de l'intelligence humaine)の第12段階において

われわれの知識の一般体系は、宇宙は単一不変の法則 (une seule loi immuable) に支配されるという信仰の土台に基づいて再組織されるであろう。宗教、政治、道徳及び市民法体系のように、すべての応用体系は、知識の新体系と調和の中におかれるであろう。<sup>註14</sup>

と言っているのは、当時の考え方が、啓蒙運動によって中世カトリック的思考方を打破したとは言っても、フランスでは、依然としてカトリック教が強固であり、その影響のため、現代の如く科学を全く神から独立させた世俗世界<sup>註15</sup>として扱わず、先に記したように、神の与えた法則として受入れたことを示している。つまり、自然科学のすべての法則の根本的基盤には神の支配する自然の一元性、均一性があるとされたわけである。これはまた、サンーシモンによれば人間の社会にも同様適用される法則の根本的基盤がある、ということである。そして、この一元性・均一性は、神に対する信頼があればこそ出来るもので、神に対する信頼＝信仰がなければ、先にも記した如く、自然活動も人間も各個バラバラの活動することになって、宇宙はまとまりがなくなるであろう。サンーシモンは先に記した如く「宇宙は単一不変の法則に支配されるという信仰の土台に基づいて…」と記していることから明らかであろう。彼はハッキリと神を信じる<sup>註16</sup>と明言し、自分の信仰は理神論 (deisme) だ<sup>註17</sup>と称している。

ここで、理神論に触れておきたい。理神論は、今日では、神が自然法則を創造し、宇宙を神が創造してからは、神が自然法則のなすがままにまかせたという見解であるが、これは元来、無神論 (athéisme)、多神論 (polythéisme) に対する有神論と同じ意味に用いられたもので、今日、厳密に限定して用いられた見解は、18世紀頃から用いられたものであって、サンーシモンは、この限定された見解の理神論でなく、多神論に対する有神論を指しているを見てよいのではなかろうか。それは、

エジプト人は、星、川、山、ある野菜、ある動物を崇拜した。<sup>註18</sup>

それから少したって、ギリシヤ人の間にホーマが現われた。彼は宗教的体系を進めた。<sup>註19</sup>

ホーマは組織者という意味で多神教の開祖である。<sup>註20</sup>

それからホーマによって創造されたあらゆるものの統一を通して、ソクラテスは一つのもので形成する考えを思いついた。<sup>註21</sup>

ソクラテスは一神論の発明者であった。しかし、ソクラテスの死後 500 年たって一神論者だったのはローマ人だった。<sup>註22</sup>

一神論を組織化し、公法を作って、その科学で最大の進歩をしたのはローマ人だった。<sup>註23</sup>

イエスはソクラテスの 500 年後に現われた。イエスは良き人であった。……イエスは汚れない人だった。彼はキリスト教を基礎づけ、それを理神論の上に基づかせた。<sup>註24</sup>

パウロはイエスの弟子で英才で……キリスト教の教義を彼が組織化した。<sup>註25</sup>

と述べていることから推量出来るであろう。

- 註1. Oeuvres tome VI, Introduction aux travaux Scientifiques du XIX<sup>e</sup> siècle, p.14
- 註2. Oeuvres tome VI, XIX<sup>e</sup> siècle, p.102
- 註3. Oeuvres tome VI, XIX<sup>e</sup> siècle, p.148
- 註4. Oeuvres tome VI, XIX<sup>e</sup> siècle, p.155
- 註5. Oeuvres tome VI, XIX<sup>e</sup> siècle, p.156
- 註6. マタイによる福音書第7章12、ルカによる福音書第6章31
- 註7. Oeuvres tome VI, XIX<sup>e</sup> siècle, p.176
- 註8. テサロニケ人への第二の手紙第3章10
- 註9. Oeuvres tome V, Memoire sur la science de l'homme, p.8
- 註10. 創世記第3章24
- 註11. Oeuvres tome V, Memoire, p.286
- 註12. Oeuvres tome V, Memoire, p.303
- 註13. Oeuvres tome V, Memoire, p.310
- 註14. Oeuvres tome V, Memoire, p.173
- 註15. 東北学院大学論集文学部キリスト教学科第2号（昭和45年9月）森野善右衛門「自然科学と自然の科学」
- 註16. Oeuvres tome III, Nouveau Christianisme, p.107
- 註17. Oeuvres tome VI, XIX<sup>e</sup> siècle, p.171
- 註18. Oeuvres tome VI, XIX<sup>e</sup> siècle, p.162
- 註19. Oeuvres tome VI, XIX<sup>e</sup> siècle, p.162
- 註20. Oeuvres tome V, Memoire, ps. 139, 144
- 註21. Oeuvres tome VI, XIX<sup>e</sup> siècle, p.162
- 註22. Oeuvres tome V, Memoire. p.144
- 註23. Oeuvres tome V, Memoire, p.154
- 註24. Oeuvres tome VI, XIX<sup>e</sup> siècle, p.163
- 註25. Oeuvres tome VI, XIX<sup>e</sup> siècle, p.163

## 5. お わ り に

サンーシモンは、すでに見たところで明かなように、自然科学のみならず、人文、社会両科学においても、科学として論じている。彼の時代は、今日の如く、科学が宗教から判然と独立した存在ではなかった。18世紀以後、序々にその区分が明確にはなって来た時代である。従って、彼が科学が科学として独自の道を歩み、科学のための科学として社会に対しての価値判断を捨て去る様相が生ずることには考えが及んでいないかもしれない。しかし、科学が科学として独自の歩みをすることが、社会から見て価値判断を加えないために、社会のためにならないことを進めることになることと警告していることは確かである。すなわち、

神学は神学校で教えられる唯一の科学である。神学は法王及び枢機卿たちが研さんを積まなければならないと自ら信じている唯一の科学である。……

この科学は、もちろん、異端の僧侶にとっては、すべての科学の中での一番重要なものであ

る。この科学は、信者たちの注意をささいな事物の上に注がせるように僧侶たちに手段を与え、また、信者たちに、永遠の命、つまり、最も貧しい階級の精神的、物質的生活の出来る限り迅速な改善を得るために、自ら提案せねばならない地上の大目的を見失なわせる手段を与える。<sup>註</sup>と述べている。これは神学という科学が、神学自体のために研さんされて、地上で信者に価値ある働きをしていないことを示している。神学のための神学が追求され、人間のための神学が研究されていないということである。このように、サン＝シモンは科学が全く宗教から遊離することの危険性を暗示していたのではなかろうか。

註. Oeuvres tome III, N. Christianisme, p.125, 126